

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3590600239		
法人名	社会福祉法人 ひとつの会		
事業所名	グループホーム フィラージュ開出		
所在地	山口県防府市開出32-8		
自己評価作成日	令和3年5月15日	評価結果市町受理日	令和3年10月7日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 やまぐち介護サービス評価調査ネットワーク		
所在地	山口県山口市吉敷下東3丁目1番1号 山口県総合保健会館内		
調査実施日	令和3年6月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当グループホームは、「人のために走れ」という大きな法人理念の下、職員一丸となって、認知症の入居者が、その人らしく生活できるように最大の配慮をしながら運営しております。事業所名にある『フィラージュ』は、利用者・家族・地域に対し気持ちを込めて丁寧に開わり、職員と共に「笑」と「幸」を共有するという意味を込めて命名されたものであり、その意味を職員が胸にしっかりと刻みながら入居者のための支援に当たっております。グループホームにのある建物には、30床からなる特別養護老人ホーム、10床からなるショートステイ、デイサービスが併設された高齢者福祉複合施設内に位置し、各事業所が相互に情報交換しながら、きめの細かなケアに努めております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍にあって家族や地域との交流や外出などの制限がある中で、職員は毎月、家族に電話されて利用者の様子を伝えられたり、3ヶ月毎に、利用者を担当している職員が写真を添えて自筆のお便りを送られるなどして、家族の安心を図るように努めておられます。行き先を告げないミステリードライブを企画されたり、拠点施設内の散歩の機会を増やすなどして、利用者の気分転換の支援をされ、落ち着いた生活環境を維持されています。職員は観察力の向上に努めておられ、日頃から意識的に利用者とのコミュニケーションを図っておられ、お互いに自然に笑顔となり、「ありがとう」の言葉を交わせる関係づくりをされています。ケアの実例を基に、ユニット会議を活用されて、褥瘡対策や誤嚥防止のための食事の形状の工夫など実践的なスキルの習得に取組まれ、職員同士で利用者本位に意見を交換されて、ケアの統一と共有を図っておられます。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○	1. ほぼ全ての利用者の	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○	1. 毎日ある	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員は、生き活きと働けている (参考項目:12. 13)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:31. 32)	○	1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:29)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『利用者・家族・地域に対し、気持ちを込めて丁寧に関わり、職員と共に“笑”と“幸”を共有する』という施設の理念を職員一人ひとりが共有しケアを実践している。また、各ユニットごと、法人の基本理念である「人の為に走れ」を具現徹底すべく、毎年、「ユニットの指針・コンセプト」を職員で話し合い、これをユニットの入口に掲出するなどして、常に理念の共有・実践に努めている。	地域密着型サービスの意義をふまえた法人の理念のもと、法人の全体会議で基本方針や具体的運営方針を話し合っている。それに沿った年間の「ユニットの指針・コンセプト」をユニット毎に話し合い、「入居者・職員共にその人らしく笑顔で生活出来るように各入居者にあったケアの提供を行う」「入居者一人ひとりが「幸」を実感できる、ありがとうが飛び交うユニットに」を掲げて、事業所内に掲示して共有し、ケアの実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	令和2年度は、新型コロナ感染拡大防止の観点から、事業所自体が地域の一因として日常的に交流している関係には至っていない。最近のコロナ禍においては、「フィラージュだより」を発行して、公民館等に配布し、地域との交流に努めている。(コロナの影響のない平年においては、地区行事に積極的に参加し、交流している。)	この1年は、新型コロナ感染拡大防止の観点から、事業所や拠点施設での地域の人の参加を得た行事の開催や、ボランティアや幼稚園児、中学生の来訪は中止し、地域行事への利用者の参加もない。年4回、事業所だよりを公民館に配布して事業所の様子を地域の人に伝えている。利用者と職員は散歩時に地域の人と挨拶を交わすなど、地域との交流に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	令和2年度は、新型コロナ感染拡大防止の観点から、認知症の人の理解や支援の方法を地域の人々に向けた地域貢献には至っていない。(コロナの影響のない平年においては、地域の民生委員や慰問ボランティアを受け入れるなどしている。)		
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	外部評価は、独善的になりがちなグループホーム運営の客観的な評価であり、足らざる点を是正する絶好の場であるというを認識しており、指摘された事項については、職員間に共有し、その是正改善に努めている。	管理者は、ユニット会議で評価の意義や項目について職員に説明し、まとめたものを職員に回覧している。前回の外部評価結果はユニット会議で話し合い、項目毎に意識啓発を行っている。評価の取り組みを通して、「共用空間における一人ひとりの居場所づくり」に取り組み、リハビリ意欲の高い利用者のために、リハビリコーナーを新たに設けて活用している。	・全職員での自己評価の取り組み ・評価の取り組みの活用

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和2年度は、新型コロナ感染拡大防止の観点から運営推進会議を開催していない。コロナの影響のない平年においては、地区自治会長、民生委員、防府西包括支援センター職員、入居者家族代表、ホーム職員のメンバーにより毎回ホームでの活動状況や入居者の生活状況について報告を行っている。	会議は2ヶ月に1回、拠点他施設と合同で開催し、利用者の状況や活動報告、行事予定、事故事例、ヒヤリハット報告、職員の研修状況等を報告し、災害対策などについて話し合っている。この1年は新型コロナ感染拡大防止の観点から運営推進会議を開催していない。地域メンバーの自治会長と民生委員には、年4回の事業所だよりを送付している。	
6	(5)	○市町との連携 市町担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	防府市高齢福祉課、防府西包括支援センター職員と随時報告、直接電話での相談や助言をいただくなど協力体制を構築している。今後ともグループホームの実情や問題点について積極的に伝え、協力関係構築に努めていくこととしている。	市担当者とは、法人を通して、更新申請の書類送付時や電話などで、相談して助言を得たり情報交換して、協力関係を築いている。地域包括支援センター職員とは、電話などで利用者の受け入れなどについて相談して、支援につなぐなど、連携している。	
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設の常設委員会として、「身体拘束廃止委員会」が設置されており、同委員会において、毎月、身体拘束の絶無に向けた意識統一を図っており、ユニット職員一人ひとりに対しても身体拘束防止に向けた意識の浸透化を図っている。	拠点合同で身体拘束廃止委員会を3ヶ月に1回開催し、管理者と委員の職員が勉強会に参加している。職員は、年1回の内部研修や常に関連できるマニュアル、身体拘束等適正化の指針、認知症の人への対応ガイドラインなどで学び、「虐待の芽のチェックリスト」を活用して全職員が自己チェックして、身体拘束や抑制のないケアに取り組んでいる。スピーチロックで気になるところは職員同士で注意し合ったり、管理者が指導している。玄関は昼間は施錠せず、外に出たい利用者とは、職員と一緒に出かけるなど気分転換の支援をしている。	
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	令和3年5月開催のユニット会議において、「高齢者虐待防止関連法」についての研修を実施するなど、高齢者虐待防止についての意識の浸透化を図っている。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	令和3年5月開催のユニット会議において、「成年後見制度」についての研修を実施し、必要性の理解に努めた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結等に当たっては、重要事項説明書、医療、看取りについて詳細にわたって説明を行い、十分納得いただいた上で契約書等への署名押印をいただいている。また、本人、家族の希望があれば、法人内の特別養護老人ホームやケアハウス等への転居、選択肢、他事業所への連絡・調整・相談に応じている。		
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	施設の苦情受理・処理体制は、施設長、ユニットリーダーが一元的に対応処理している。また、部外の受理機関も契約時に明示している。	契約時に家族に重要事項説明書で相談や苦情の受付体制や第三者委員、処理手続き等について説明している。新型コロナウイルス感染防止のため面会が制限される状況の中、窓越しの面会や3ヶ月に1回の事業所だよりの送付、利用者の状況を知らせる1ヵ月に1回程度の電話などで、日頃の様子を知らせて、家族からの意見や要望を聞いている。転倒の多い家族からの提案を受け、転倒時のけがの軽減のため、床のタイル上にクッションフロアマットを敷くなど、意見を運営に反映させている。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のユニット会議において、運営に関する職員の意見や要望を聴く機会を設けており、ユニット職員全員で検討を行い、実務面に反映させている。	管理者は、月1回のユニット会議や担当する職員が参加する委員会(身体拘束廃止、リスクマネジメント、感染対策、褥瘡、研修、給食、安全衛生)活動報告時、年2回の個別面談、毎日の申し送りなどで職員の意見や提案を聞く他、日頃から職員に声かけをして意見を言いやすくする工夫をし、日常の業務の中で意見を聞いている。必要時には随時、個別に面談をしている。職員の提案から浴室の手摺りを追加設置するなど、意見や提案を運営に反映させている。	
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長、グループリーダーは、半期に一回、職員の人事考課の提出を求め、これをもとに職員と面接をし、職員一人ひとりがやりがいと向上心を持って働けるように職場環境の改善に努めている。また、法人として介護支援専門員、介護福祉士、社会福祉士等の資格取得を奨励しており、資格取得者に対しては、資格手当を支給するなど介護スキルの向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から部外の研修受講の機会はなかったが、褥瘡防止やリスクマネジメントなどテーマを決めた部内研修会は適宜開催している。	外部研修は、研修委員会を通して職員に情報を伝え、本人の希望や段階に応じて勤務の一環として受講の機会を提供している。受講後は復命書を回覧し、ユニット会議で報告している。この1年はコロナ感染防止で受講していない。法人研修(拠点内研修)は、研修委員会を中心に月2回、同じ内容で実施して、職員が参加しやすいようにし、外部講師を招いたり管理者や看護師が講師となって、感染対策(食中毒、インフルエンザ、ノロウィールス)、介護技術、接遇、防災、褥瘡対策、オムツのあて方、緊急時対応、リスクマネジメント、高齢者虐待、身体拘束、看取り介護等について学んでいる。拠点施設で運営委員会、褥瘡対策委員会、リスクマネジメント委員会、感染対策委員会、安全衛生委員会を設置し、月1回、会議、勉強会を開催している。内部研修は、ユニット会議で法人研修の復伝をしたり、ワンポイント研修として、心肺蘇生、火災時対応、感染対策、虐待防止、誤嚥時の対応、褥瘡対策などについて学んでいる。新人は日常業務の中で管理者や先輩職員が指導している。	
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	防府市内のグループホームが参加する連絡協議会に加盟しているが、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から協議会の開催はなかった。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの開始に当たっては、本人のニーズをしっかりと把握し、ニーズの具現化に向けた支援方法について話し合ってケアプランに反映させている。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスの開始に当たっては、本人のニーズを踏まえて、家族の意向もしっかりと把握し、ニーズの具現化に向けた支援方法について話し合ってケアプランに反映させている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスの開始に当たっては、本人の精神的な状態、身体的な状態を踏まえ、最適な支援方法を本人、家族と話し合っている。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者毎に担当する職員を決めており、その職員が暮らしを共にする者同士の関係を築き、入浴者の悩みや心情などの把握に努めている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者ごとに担当する職員を決めており、その職員が家族との関係性の保持に努めている。日常生活については、担当者が「おたより」として近況を家族に知らせている。		
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	必要があれば、馴染みの人や場との関係継続の支援に努める。	新型コロナ感染防止対策のため、家族の窓越しの面会のほかは、来訪する人はほとんどない状態であるが、家族には電話で随時近況等を連絡している。3カ月に1回、写真付きの事業所だよりを送付し、利用者を担当する職員が自筆で近況を知らせて、関係継続の支援に努めている。	
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	9名の入居者が穏やかな日常生活を送っていただけるよう、関係性を把握した上で、適宜、席替え等も行っている。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在、そのようなケースは存在しない。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の生活上のニーズをしっかりと把握し、家族の意向も汲み取った上で、ケアプランを作成し、支援を行っている。	入居前に自宅を訪問して面接を行い、本人や家族から基本情報として思いや意向を聞いたり、利用前の施設から情報を得て、アセスメントシートに記録している。利用者の日々の暮らしを24時間生活リズム表に記録し、言葉や表情、行動、職員の気づきなどを支援経過に記録し、ユニット会議のカンファレンスで検討して、一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、家族から情報を聞いて話し合い、本人本位に検討している。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に本人、家族から生活歴な馴染みの暮らしに関する情報収集に努め、グループホームに入居後も極力、延長線上での生活ができるように配慮している。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアプランには、入居者の一日の生活の流れを取りまとめた「生活リズム表」を作成し、これを職員全員に共有し、このリズム表に基づいてケアが実践できるように努めている。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に家族に「おたより」を発送し、グループホームでの生活の状況を説明報告しており、その都度、ご家族の意見要望を把握し、現状に即した介護計画になるよう努めている。	利用者を担当する職員と計画作成担当者、管理者が中心となって、月1回のユニット会議でカンファレンスを行って、本人や家族の思いや意向、医師や訪問看護師、拠点施設の看護師等の意見を参考に、全職員で検討して介護計画を作成している。3ヶ月ごとにモニタリングを行い、1年毎に見直しをしている。利用者の状態の変化があればその都度見直しをして、現状に即した介護計画を作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一日の生活は、一時間毎に生活の様子を記録した「ケース記録(第2表)」、特異な状況があった場合の「経過記録(第3表)」、バイタル結果、排泄状況、水分補給状況を記録した「24時間シート」の各記録紙に記録し、職員間で情報の共有に努めており、介護計画の見直しに生かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームでの生活や業務の改善提案、ケアの改善点は、その都度、「連絡帳」に記載するように努めており、緊急性を有するものについては、即改善し、それ以外のものについては、毎月のユニット会議において検討し、改善を要するものについては話し合いの上、改善している。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	令和2年度は新型コロナ感染拡大防止の観点から高齢者を支える地域資源との接触は極力控えたが、コロナ禍のない平時においては、施設内の地域交流室の地域開放を随時行っている。		
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎週水曜日（一部入居者は隔週土曜日）に往診日を設定し、かかりつけ医に対し、入居者一人ひとりについて医療上の現状と問題点について説明し、適切な医療が受けられるよう支援している。	本人や家族の希望する医療機関をかかりつけ医とし、週1回（一部隔週）の訪問診療や週1回の訪問看護師の来訪がある。薬剤師が来訪して服薬管理をし相談に応じている。歯科は必要時に往診があり、他科は必要に応じて家族の協力を得て受診したり、事業所が支援している。受診結果は受診記録に記録して職員や関係者が情報を共有し、必要に応じて電話や手紙で家族に連絡している。緊急時や夜間は主治医や訪問看護師と連携して、適切な医療が受けられるよう支援している。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の医療上の特異な事項については、施設の看護師及び訪問看護師と情報を共有し、必要があれば、適切な医療機関に受診いただいている。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した場合は、病院の担当看護師に介護サマリーを作成交付し、また、退院時には地域連携室と緊密な連携を図り、円滑な入院・退院ができるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ケアプラン更新時に、終末期ケアの在り方について家族と話し合い、「重症化した場合における対応についての同意書」により施設側とご本人及び家族等の意思疎通を図っている。	契約時に家族に「重度化指針」を基に事業所のできる対応について説明し、介護計画更新時に、終末期ケアについて家族と話し合い、「重症化した場合における対応についての同意書」を得ている。実際に重度化した場合には、早い段階から家族や主治医、看護師ら関係者と話し合い、医療機関や他施設への移設、事業所での看取りを含めて検討し、方針を決めて共有して、本人や家族の意向に沿う支援に取り組んでいる。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	事故が発生した場合は、事故報告書を作成し、事故原因及び再発防止について職員全員で話し合っており、再発防止について検討している。また、事故に至らないヒヤリハットについても積極的に報告を求めている、重大事故につながる事故要因の除去に努めている。	事例が生じた場合はヒヤリハット、事故報告書に内容や対応、再発防止策を検討して記録し、管理者に報告して回覧している。ユニット会議で再確認し、研修内容や介護計画に反映させ、利用者一人ひとりの事故防止に取り組んでいる。リスクマネジメント委員会に報告し、毎月、ヒヤリハット報告や事故報告を分析、検討している。拠点内研修で緊急時対応やリスクマネジメントについて学び、内部研修で指導職員が、心肺蘇生法や誤嚥時の対応法、感染予防などの実践的訓練を実施しているが、全職員が応急手当や初期対応の実践力を身につけるまでには至っていない。	・全職員が応急手当や初期対応の実践力を身につけるための定期的訓練の継続
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	事業所内に防災管理委員会を設置し、年3回、昼夜の火災避難訓練、風水害訓練を消防署の指導・協力のもとに消火避難訓練を入居者とともに実施している。	拠点施設合同で年3回(内2回は昼夜の火災、1回は風水害を想定)、消火、通報、避難訓練、避難経路の確認を、利用者の一部も参加して行っている。内1回は消防署の協力を得て通報訓練を行っている。緊急連絡網に地域の自治会長が入っており、拠点施設を市指定の一次避難所としているが、地域を含む連絡網の訓練は行っていない。この1年間、コロナ感染防止の観点から、地域との協力体制を築く積極的な取り組みはできていない。	・地域との協力体制の構築

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	各ユニットの目立つ場所に「認知症の人への対応 ガイドライン」を掲出して、「脅かさない・急がせない・自尊心を傷つけない」の「3つのない」の実践に努めている。	職員は拠点内研修で接遇について学び、事業所内に「認知症の人への対応 ガイドライン」を掲示して、利用者の人格の尊重やプライバシーの確保、守秘義務の遵守について理解して、利用者の誇りやプライバシーを損ねない対応に努めている。気になる場所があれば管理者が指導したり、職員同士で注意し合っている。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	レクリエーションでの集団と個別の過ごし方の選択肢を多く出来るように工夫している。また、お茶タイムにしても画一的にならないようにその都度、入居者に飲みたい飲料を伺うなど自己決定できるようにしている。毎週水曜日を、休浴日に設定し、当該日には職員と入居者が関わりをもつ日としている。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の都合や施設の都合で入居者の行動を決定することなく、常に「入居者ファースト」の意識を持ち、その入居者にとって何が一番やりたいことなのかを考えながら支援に当たっている。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	1ヵ月に2回、訪問美容があり、入居者の希望を踏まえてカットやパーマ、毛染めを行っている。各洗面所には、櫛を置いて、整容には特段の配慮をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	月に1回は、グループホームで職員と入居者がお好みの料理を作って楽しんでいる。おしぼりの準備やお盆拭きなど入居者に応じた出来る範囲内の手伝いをお願いしている。	主食は事業所で炊き、副食は拠点施設の配食を利用している。利用者の好みや味付け、適した形状などの報告を受け、給食委員会が検食して、メニューの見直しなど工夫している。利用者はテーブル拭きやお盆拭き、洗った食器を拭くなどできることを職員と一緒にやっている。月に1回昼食づくりの日を設け、利用者は野菜を切ったり、食材を合えるなどして、牛丼、野菜炒め、ちらし寿司、おでんなどを職員と楽しみながら作っている。由来などを記したカードを添えた行事食(折詰のおせち料理、ひな祭り寿司、敬老の日の赤飯、餅つき、にぎり寿司バイキング、ケーキバイキングなど)や誕生日食、おやつづくり(インドネシアのお菓子、ホットケーキ、ぜんざい等)、月1回のあおだも喫茶(拠点の地域交流室を喫茶店に見立て茶菓子を選んでお茶を楽しむ)、収穫した茄子の辛子漬けづくりなど、食事が楽しみなものになるように工夫して支援している。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事摂取量や水分補給量が一目で分かるように「24時間シート」に記録しており、入居者一人ひとりの状態の把握に努めている。		
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、緑茶でうがいをしていただき、その後にブラッシングしていただくなど口腔ケアに努めている。また、義歯の洗浄やポリデンT消毒も毎日行っている。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	「24時間シート」を活用して入居者の排泄パターンの把握に努め、適切な時期に積極的な声掛けを行うなどして、排泄の自立に向けた支援に努めている。	24時間の排泄シートを活用して排泄のパターンを把握し、一人ひとりに合わせた声かけや誘導を行っている。トイレ内にボールを設置して立ち上がりの補助に活用するなど、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	「24時間シート」を活用して入居者の排泄パターンの把握に努めており、入居者にあった便秘予防のための排便コントロールに努めている。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	2日に1回は入浴できるように体制を組んで入浴いただいている。入浴時は、音楽を流したり、入浴剤を入れるなどして、楽しみながら入浴していただけるように努めている。	入浴は毎日、13時30分から15時までの間可能で、2日に1回は職員との会話や音楽を楽しみながらゆっくり入浴できるよう支援している。脱衣所にはポールを設置して利用者の体を支える等の工夫している。入浴したくない利用者には、入浴時間の変更、職員の交代、声かけの工夫などをして、無理なく入浴できるようにしている。利用者の状態に合わせて、シャワー浴や足浴、清拭、拠点施設の特殊浴槽の利用等、個々に応じた入浴の支援を行っている。	
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	「24時間シート」を活用して入居者の休息、睡眠状況を的確に把握しており、安心して気持ち良く休息・睡眠できるように居室の温度・湿度管理も徹底し、環境整備に努めている。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者全員の服薬状況が分かるように各ユニットごとに「お薬説明書」のファイルを作成し、職員が薬の目的や副作用、用法・用量について理解するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員の日々の支援体制に余裕があれば、積極的に施設敷地内の散歩やリハビリの声掛けをして、気分転換等の支援に努めている。	誕生会、インドネシア料理を知る会、敬老会、クリスマス会、餅つき、節分祭、ユニット間の球技大会(ボーリング、風船バレー、玉入れ)、魚釣りゲーム、春期フィラリンピック、あおだも喫茶、俳句を作る、習字、季節の壁面飾りづくり、テレビやDVDの視聴、本や雑誌を読む、歌を歌う、塗り絵、貼り絵、折り紙、紙芝居、サイコロゲーム、トランプ、百人一首、オセロ、将棋、編み物、ラジオ体操、みんなの体操、オリジナル体操、しゃっきり体操、嚙下体操、テレビ体操、風船バレー、聞紙折り、新聞紙でごみ箱作り、昼食づくりの日、おやつ作り、雑巾を縫う、床の掃除、窓ふき、居室の洗面台の掃除、洗濯物干し、洗濯物畳み、おしぼり干し、タオルたたみ、野菜作り(茄子-水やり、草取り収穫)等、一人ひとりが張り合いを持ち、楽しむことができるように支援している。	
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	去年はコロナの影響もあり、頻繁な外出は控えていたが、その中でも、施設敷地内の散歩や、四季折々の場所や希望を聴いてのドライブを行い、気分転換に努めている。	新型コロナ感染防止のため、外出は制限しているが、ドライブでの紅葉狩り(毛利庭園)や、市内の行き先を告げないミステリードライブ、拠点施設敷地内の散歩など、外出できるよう支援に努めている。	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在の入居者は本人、家族の希望により、お金を所持していない。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持ち込んでおられる入居者は、必要な時に自ら電話して施設外の方と通信しておられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間には、入居者が作成した季節感溢れる壁紙や写真を掲出し、居心地よく穏やかに過ごせる空間作りに努めている。	各ユニットの居間兼食堂は緑の木々のある中庭に面しており、天井まである窓からは自然の光が差し込んで明るい。ゆったりと広い空間にはテレビやソファ、食卓テーブル椅子を配置し、利用者は思い思いの場所でくつろいでいる。台所は居間兼食堂と対面式で、ご飯を炊く匂いや食事を用意する音などがして家庭的な雰囲気を感じることができる。壁面には利用者と職員が作った季節に応じた大きな作品(折り紙、貼り絵など)を飾り、季節の花を活けている。温度や湿度、換気などに配慮し、1日1回全面消毒して、安心して居心地よく過ごせるようにしている。	
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	両ユニットの共用空間である「サンルーム」を、独りになれたり、入居者同士の娯楽の場所として活用している。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居に当たっては、使い慣れた茶碗や箸を持参して頂き、また、居室にも家族の写真を飾っていただくなど居心地よく過ごせるよう努めている。	寝具や机、椅子、籐椅子とテーブル、ソファ、テレビ、整理ダンス、衣装ケース、ハンガーラック、クッション、化粧品などの日用品など、使い慣れたものや好みのものを持ち込み、家族写真や自分の作品を飾って、居心地の良い空間を作っている。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ユニット内に、立ち上がり訓練や歩行訓練を行う「リハビリコーナー」を設け、本人のリハビリ意欲が向上できるような環境整備に努めている。		

2. 目標達成計画

事業所名 フィラージュ開出グループホーム

作成日：令和 3 年 9 月 30 日

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	4	全職員での自己評価の取り組み及びその活用を図る。	全職員が自己評価の意義や各項目の内容について理解し、自施設の問題や課題を浮き彫りにし、共有していく。	ユニットミーティング時に問題点や課題を抽出し、その解決に向けた施策を話し合い、結果を検証していく。	12ヶ月
2	35	全職員が応急手当や初期対応の実践力を身につけるための定期訓練の継続	全職員が共通認識の下、応急手当や初期対応の実践力を身につける。	施設の全体研修やユニットミーティングにおいて、応急手当や初期対応の実践的訓練を反復して実施する。	12ヶ月
3	36	地域との協力体制の構築	災害時の地域協力体制を構築する。	避難訓練に地域住民の参加を呼び掛け、災害に対する課題を共有していく。	12ヶ月
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。